



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2009/07/12(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 54

インターハイ北海道予選（釧路大会）の報告が送られてきましたので掲載します。

21年高体連バスケットボール全道選手権大会観戦記

「小よく大を制す」今、指導者が見本とすべき旭川工業のチームについて！

指導者育成専門委員会 川村 健二

今年度より指導者育成専門委員会に名を汚すことになりました。早速仕事を仰せ付け、先日釧路で行われた高体連全道大会の観戦記を書いている次第です。

男子は三つ巴の得失点差の可能性もありましたが、頭一つ抜け出していた大麻が2年ぶりに、女子は19年連続で山の手が優勝、2位は男子が旭川西、女子が3年連続創成となり、全国大会切符を手中にして大会を終えました。

大麻は札幌地区大会こそ2位での出場でしたが、決勝リーグを観戦した限りではディフェンスの崩れが小さく、4番竹田、7番兼子を中心に、最後のチーム力という場面で、今大会一番勝っていたように思います。

その大麻に決勝リーグ初戦で完敗した旭川西でしたが、翌日の恵庭南戦では必死に粘っての逆転勝ち、最終戦、同じ旭川地区同士、旭川工業高校を振り切って、35年ぶりの嬉しい全国出場となりました。苦節何年になるのでしょうか、日下部コーチの全国大会に向けた指導に期待したいものです。

3位の恵庭南は個人技に優れ、バランスの取れたメンバーを要して新人戦で優勝し、札幌地区予選も制しながら、決勝リーグ初戦旭川工業にせり勝ったものの、最終日、旭西・大麻の2戦とも落としての敗退、詰めの甘さが出た感が有ります。4位は旭川工業でしたが、その戦いぶり等については後ほど述べることにします。

女子は山の手が決勝で創成に圧勝の19連勝、まだ格の違いが有るところを見せ付けられた感じのゲームでした。山の手はパス一つ取っても、早さ・上手さを求めたファンダメンタルにしっかりと取り組んでいる印象が強く有ります。特にディフェンスにおいても相手攻撃の芽を素早く摘み取ってしまう2線3線目の連携の速さ・強さが際立っており、全国を視野において、1年生センターに頼らず、守り、攻め切るバスケットを必死で鍛えているように感じました。

2位の創成は、札幌地区予選での2点差が嘘のような悔しい100点ゲームでの敗退、今後その悔しさをバネに全国でどう戦うのか、注目したいと思います。

3位は旭川藤が、4位は帯広南商業という結果となりました。旭川藤は幾分組み合わせに助けられた面もありますが、ともかくも2年連続ベスト4を確保。今後、更にファンダメンタルの向上と当たりに負けない強さを培い、今以上の戦いをして欲しいと思っています。

帯広南商業は主力3人が2年生で来年が楽しみなチームです。現在のオーソドックス過

ぎるくらいのチームカラーに強固さと独創性を加え、再び優勝争いに加わって欲しいものと期待したいところです。

その他、目に付いたチームを上げるとしたら、海星高校でしょうか。大会毎に他校を脅かす存在になってきそうな予感があります。

今大会の感想の見出しは、「小よく大を制す」としましたが、大会の歴史を考えるなら、きっと「**東海第四、昭和49年以来36年ぶり、ベスト4進出もならず**」となるのでしょうか。

東海第四は札幌予選こそ第3位でありましたが、昨年度の優勝校であり、選抜大会でも優勝しています。更に日本協会強化策エンデバー、アンダー18には187センチ4番須田、195センチ5番西川2名が参加しており、選手層が薄くなったわけでもありません。

札幌地区どころか、今大会、悠々優勝しても不思議ではないチームであると、私ならずとも多くの人が思い、感じていたはずでした。

それに対し旭川工業は、地区予選で旭川西に完敗し、旭川大学高校にはやっとなんと勝って、どうにか今大会に出場出来た・・・というほど今年は力が無かった・・・はずでした。

迎えた全道大会、初戦の苫小牧東戦からもたつき、2回戦帯広工業戦は一時20点も負けていたのを、延長でどうにか逆転勝ちして、やっとなんと東海第四戦を迎えました。

そこまでは、やはり強くないと思われても当然の内容で、「2回戦も勝ったし、今年はこれでご苦労さん・・・かな」と思っていたのが正直な気持ちでありました。

結果的には、帯広工業戦で開き直った逆転勝利に、自分達がどう戦えばよいのかやっとなんと目覚めた感があり、大きな自信にもなったようです。

その東海第四戦では5番岡音(165cm)を中心に、ゾーンで対抗し低さを補い、リバウンドには2人、3人とスズメ蜂にミツバチが戦いを挑むように飛び掛り、走り勝ち、3Pシュートも確実に決め、正に快勝！会場をバスケットボールの面白さと感動に浸らせてくれた一瞬でありました。

東海第四は何故かほとんど速攻を出さずセットでの攻撃のため、常に5対5の対峙となり、旭川工業にとってはそれが助けとなった感もあります。東海は守っても旭川工業のドライブインを押えるだけの脚力を有せず、途中ゾーンを組むも、今度は外から3ポイントを決められ、監督・選手にとってもまさかの歴史的敗退を喫する結果となってしまいました。

旭川工業は次の恵庭南戦も接戦を演じ、更には優勝した大麻にも延長で惜敗、最終戦の旭川西高戦は力つきて敗れ、4位で終える結果となりました。

しかし、プログラムでは180センチ以上が一人もいない、中学生チーム並みの小さいこのチームが、長身揃いの東海を破り、優勝した大麻に延長戦を演じた戦いぶりは、鼻根目に見なくても賞賛に値するものと言えるでしょう。

賞賛云々というより、各チームが長身チームを相手に戦っていくためには、是非見習うべきチーム像を示してくれていると言っても過言ではないとの思いから、標題を掲げ、この原稿に向かった次第です。

彼ら何人かは入学時、その身長から高校女子の相手をしていた程で、別のチームに入っていたらユニフォームが当たらない者もいたかもしれません。身長は低くとも昨年の3年生はまだ幾分能力は高く、昨年度は選抜大会決勝において1点差で敗れはしましたが、優勝した東海第四と死闘を演じた姿がまだ記憶に残っています。

今年の選手達は、身長や能力的弱点を補うために、先輩以上に練習を積んだのでしょうか。しかし地区予選からしてこの大会の姿はとても想像出来ませんでした。

旭川工業の最大の長所は、練習と試合経験に裏打ちされた豊富な運動量と、速さを秘めつつ、一番難しいゲームコントロールの上手さにあると言えます。

前野 和義総監督は、『今年の旭川工業がベスト4に残り、優勝した大麻さえをも脅かすだけのゲームをした・・・ということは、見方を変えると今年の男子のレベルが、実は例年に比べて低い証である。』と言い切っています。今年の全国大会出場チームが1・2回戦をも突破していけるかどうか、暗に不安を抱いている様子もありました。

旭川工業は公立ですが普通科志向の影響もあってか、ここ数年長身者不在、能力も決して高いとはいえない集まった選手を必死で鍛えている状態が続いています。

練習の量と質の高さで何とかカバーしてここまで辿り付きながらも、その戦い方には当然限界はあり、毎年あと1歩で全国行きを逃しています。勝敗の結果のみを見れば、なんだ・・・と思われるかもしれません。

しかし、旭川工業のチーム作りをもっと能力の有る選手を抱えている他のチームが真摯に見習っていけば、それほど簡単なことではないにしても、女子の山の手のように全国の長身チームに対抗し、常にベスト8以上を伺うようなチームになっていくことは決して不可能なことではないに違いありません。

時代は、全国区は勿論、外国からの留学生といった能力に優れた選手のリクルート、その成否こそが勝利の方程式となっており、もはや、集まった選手を鍛えていくだけではとくに無理な状況になっています。しかし私立であっても、今や特待で簡単に選手を集められなくなってきているのも事実のようです。それだけに、能力のある選手を揃えたチームは、その責任の重さがあることを肝に銘じてチーム作りをしていかなければ、同地区の高校チーム、保護者や中学校の先生方に申し訳が立たないのではないかと思います。

前野 和義総監督（現旭川協会長）は、そのチーム創りの中で、保護者・OBの協力を得ることは言うまでもなく、地方選手のための寮を建て、機会あるごとに道外遠征を試みるなどして全国の舞台を視野に、観衆に感動を与えてくれるチームを創ってきました。

現在、監督は息子である前野潤先生が引継ぎ、今大会を終えました。この貴重な経験を元に、旭川工業はどんなチームに生まれ変わり、新たな伝統を築いていくのか、その進化を見つめていきたいと思っています。

今回の原稿は、客観的観戦記というより、一つのチームに対する所見を述べさせて頂きましたが、意のあるところを汲んでいただければ幸甚です。若い指導者の奮起を大いに期待して終わりといいたします。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会